

<p>2. 事業の概要と成果</p>	
<p>(1) 上位目標の達成度</p>	<p>上位目標：ミッドランド州ゴクウェ・ノース地区において、学校に通っている子ども、通えていない子どもに関わらず、それぞれにあったかたちで必要な教育を受けられるようになる。</p> <p>本事業の活動によって、木の下で地面に座りながら授業を受けていた生徒が、雨季などに左右されず継続的に安全に学べるようになった。また、学校に通えていなかった100人以上の子どもたちが学ぶ機会を得て、アカデミックスキル及び生計スキルを身に付けた。なお、当初予定していた成果以外にもインパクトも生み出すことができたため、詳細は(3)達成された成果の欄に記載している。</p>
<p>(2) 事業内容</p>	<p>(ア) 校舎建設 (4校舎：1校舎 (2教室) × 4校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4つの校舎を建設するために、住民が砂、砂利、水を集め、レンガを合計で110,371個完成させた。 ・2019年1月9、10日にジンバブエ政府のインフラ部門の職員を講師としてメンテナンス講習を実施し、4校合計で60人が参加した。 ・2019年1月15、16日に、ジンバブエ政府のインフラ部門の職員によって、完成した校舎が政府の建築基準に則っており、安全であることが確認された。 ・2019年3月14日に引き渡し式が行われ、日本政府関係者、ジンバブエ政府関係者、住民や生徒など約800人が参加した。 <p>なお、引き渡し式には、在ジンバブエ日本国大使館より参事官の笠原氏、宮川氏、宮武氏が参加した。また、ジンバブエからは教育省の副大臣のEdgar Moyo氏や州と郡の行政職員が出席した。引き渡し式の様子は、現地新聞社NEWSDAYなど4社のメディアに取り上げられた。</p> <p>(イ) その他のインフラ整備</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教員住宅整備：3棟 (1棟 (6部屋) × 3校) <ul style="list-style-type: none"> ・3校の教員住宅の建設と1校のトイレ整備のために住民が砂、砂利、水を集め、レンガを合計で54,400個完成させた。 ・2019年1月9、10日にジンバブエ政府のインフラ部門の職員を講師としてメンテナンス講習を実施し、3校合計で45人が参加した。 ・2019年1月15、16日に、ジンバブエ政府のインフラ部門の職員によって、完成した教員住宅が政府の建築基準に則っており、安全であることが確認された。 2. トイレ整備：2棟 (1棟：トイレ5基 × 2) × 1校) <ul style="list-style-type: none"> ・トイレは男子用5基、女子用5基の合計10基で、それぞれ1基ずつに障がいのある生徒が利用しやすいようにスロープと便座を設置

した。

- ・2019年1月9、10日にジンバブエ政府のインフラ部門の職員を講師としてメンテナンス研修を実施し、3校合計で15人が参加した。
- ・2019年1月15、16日に、ジンバブエ政府のインフラ部門の職員によって、完成したトイレが政府の建築基準に則っており、安全であることが確認された。

(ウ) キャパシティ・ビルディング・ワークショップの実施

- ・2019年2月に4校を対象に1、2期の活動を振り返り、校舎、教員住宅及びトイレの維持管理計画を作成し、今後の学校開発における学校開発委員会のメンバーや地域のリーダー、行政担当者の役割を明確にした。各学校から25人、合計100人が参加した。

(エ) 学校収入向上トレーニング(学校開発委員会)の実施

- ・毎月学校開発委員会のメンバーと特別クラスの生徒、保護者が各学校で集まり、進捗報告や問題解決を議論する会議を行った。
- ・2019年1月に養蜂活動のフォローアップ研修を実施し、蜜蝋を使ったキャンドル、ハンドクリーム、床磨き用ワックスの作り方を実演した。また、蜂蜜を使った生姜の蜂蜜漬けなどの作り方も指導した。各学校から15人、合計60人が参加した。
- ・2019年の2月頃から一部の学校で採蜜が始まり、2019年の3月の引き渡し式ではサバラ小学校が蜂蜜を販売した

(オ) 教育の重要性を伝えるワークショップの実施

- ・2018年10から11月にかけて各学校で1回目のワークショップを行い、サッカーやネットボールなどのスポーツ大会を企画し、その中で大人や子どもが劇や歌、詩などを通して地域のコミュニティに教育の重要性を伝えた。イベントには4校合計で約1,700人が集まった。
- ・2019年2月に各学校で2回目のワークショップを行い、保護者参観を実施し、保護者が子ども達の学習環境を見学し、理解する機会をつくった。また、教育省の職員も参加し、保護者と意見交換する時間も設けた。参加者の中には、「何も持たずに椅子に座っているだけの子がいて驚いた」などの感想を寄せる保護者もいた。参加者は4校合計218人で、子どもの保護者、地域のリーダー、学校開発委員会のメンバーが参加した。

(カ) 特別クラス(学校に通えていない子どもたち向け)の開催：約90人(約30人×3校)

- ・2018年11月と2019年2月に各学校の校長、特別クラスの教員、教育省の職員の合計13人を集めて振り返り会議を行った。会議では、活動の進捗共有、学期末統一テストの作成、今度の方針などを

	<p>話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2018年11月の学期末には、113人の生徒を対象に試験を行った。 ・2019年1月に養蜂のフォローアップ研修を実施し、蜂蜜や蜜蝋を使った商品の作り方を実演した。各学校から30人（合計90人）が参加した。 <p>(キ) 効果検証</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年2月に外部評価者によるエンドライン調査を実施し、2019年5月に最終報告書が完成した。
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>(ア) 校舎建設 (4校舎：1校舎 (2教室) × 4校)</p> <p>それぞれネニユンカ中学校：137人、ンガザナ小学校：468人、セブジュール小学校：438人、サバラ小学校：844人、計1,887人の生徒が天候に左右されずに安全に学べるようになった。本事業の申請時には、天候などの影響を受けずに学習できる生徒数が各学校で4割以上になることを、成果を測る指標としていたところ、ネニユンカ中学校では全校生徒の内10割の生徒が新校舎を利用し、ンガザナとセブジュール小学校ではそれぞれ約4割の生徒が利用している。サバラ小学校は他の学校に比べて生徒数が2倍近いため、新校舎の利用率は全生徒数の約2割であった。ただし、サバラ小学校では住民が建設した校舎が1棟と現在同じく住民によって建築中の校舎が2棟あるので生徒の4割以上が新校舎を使えるようになる見込みである。</p> <p>(イ) その他のインフラ整備</p> <p>教員住宅整備：3棟 (1棟 (6部屋) × 3校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・申請時には、各学校の7割以上の教員が次年度も勤務を継続することを指標としていたところ、教員住宅が完成したことで、ネニユンカ中学校：6人、セブジュール小学校：9人、サバラ小学校16人、計31人の教員の生活環境が大幅に改善され、ネニユンカ中学校とセブジュール小学校では10割、サバラ小学校では約9割の教員が次年度の勤務継続を希望した。 ・ネニユンカ中学校の校長は、「教員住宅のおかげで学校に残りたいという教員が増えた」と話していた。 <p>トイレ整備：2棟 (1棟：トイレ5基 × 2) × 1校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しいトイレが完成したことでトイレと生徒の割合が1：27になった。割合が当初の目標値よりも低くなったのは、学校が独自に建設を進めていたトイレの数が、最終的に10基ではなく7基となってしまったためである。しかし、当団体の他の事業によってトイレ10基が追加建設予定のため、当初の目標である1：20が達成される見込みである。

(ウ) キャパシティ・ビルディング・ワークショップの実施

・4校でインフラ維持・管理及びその他の活動を継続するための計画を作った。計画書は2019年から3年間のものであり、収支計画の部分は生徒が支払う学校の収入や養蜂などの売り上げ、政府からの助成金をもとに作成した。

(エ) 学校収入向上トレーニング（学校開発委員会）の実施

・4校の学校開発委員会が事業終了時まで、それぞれの巣箱でUSD33.00（ハチミツ22kg）を得ることを、当初の目標としていたところ、事業期間中にンガザナ小学校（回収量11kg、売り上げUSD8.80）、ネニユンカ中学校（回収量8.8kg、売り上げUSD55.0）の合計で10個の蜂の巣から合計19.8kgの蜂蜜を回収し、その一部でUSD63.00分を売り上げた。サバラ小学校とセブジュール小学校では採蜜することができなかった。この地域は上記の2校より乾燥しており、水不足や乾燥により木が枯れ日陰を作ることが難しくなるなど蜂にとってとても厳しい環境であったためだと考えられる。しかし、各校で日よけや小さな水場を作るなどして工夫した結果、少しずつ収穫量が増えつつある。今後、教員が養蜂のエキシビションに参加し、学校の活動の紹介や他の地域の情報を収集することを予定している。

(オ) 教育の重要性を伝えるワークショップの実施

・ワークショップを通して地域全体が教育の重要性を理解したことで、特別クラスの生徒は継続して教育を受けることができた。3校の特別クラスに通う子どもの数が増えることを指標1としていたところ、5人が退学し、生徒数は113人から108人と減少した。退学理由は家畜の世話を含めた家族の仕事の手伝いや、他地域、他国への引っ越し等であった。

・4校で学校に通う子どもの数が増えることを指標2としていたところ、セブジュール小学校を除く3校で3~17名の生徒が増加した。セブジュール小学校では生徒数が減少した。干ばつにより不作であり、学費を支払えない家庭が多く、生徒の減少に影響した。

・4校の学校に支払われる学費の額が増加することを指標3としていたところ、2017年に対する2018年の各校における学費の増減は以下の通りであった。

- ネニユンカ中学校：-1.78%
- サバラ小学校：15.53%
- セブジュール小学校：-17.32%
- ンガザナ小学校：9.5%

長引く干ばつの影響もあり、2校で減少したが、2校では増加し、平均としては前年比5.82%の増額となった。

**(カ) 特別クラス (学校に通えていない子どもたち向け) の開催：
約 90 人 (約 30 人 × 3 校)**

・事業終了時までそれぞれの学校で、USD33.00 (ハチミツ 22kg) を得ることを、成果を測る指標としていたところ、事業期間中、それぞれンガザナ小学校：14.0 kg、セブジュール小学校：23.6 kg、サバラ小学校：22.7 kg、計 60.3kg の蜂蜜を蜂の巣から回収した。そのうち、ンガザナ小学校：USD 37.0 (5.9 kg)、セブジュール小学校：USD 20.4 (9.0 kg)、サバラ小学校：USD 222.0 (21.4 kg)、計 USD 279.4 (蜂蜜 36.3kg) を売り上げた。

・80%以上の生徒が特別クラスの終了テストで合格点 (50%) 以上をとることを指標としていたところ、学力レベル1~3の試験を受けた生徒の修了テストの合格者の割合は23.5%であった。学校別、学年別の合格者数および合格率詳細は以下の表の通りである。テストの難易度を高く設定してしまったこともあり、目標値には届かない結果となった。

特別クラス2018年試験結果

小学校名	レベル	生徒数 (人)	受験生徒数 (人)	試験参加率 (%)	合格生徒数 (人)	合格率 (%)
ンガザナ	1	24	18	75.0%	4	22.2%
	2	4	4	100.0%	4	100.0%
	卒業試験を受験	1				
	計	29	22	75.9%	8	36.4%
セブジュール	1	23	13	56.5%	4	30.8%
	2	7	7	100.0%	1	14.3%
	卒業試験を受験	1				
	計	31	20	64.5%	5	25.0%
サバラ	1	17	12	70.6%	1	8.3%
	2	17	16	94.1%	1	6.3%
	3	11	11	100.0%	4	36.4%
	卒業試験を受験	3				
	計	48	39	81.3%	6	15.4%
全3校計		108	81	75.0%	19	23.5%

・ンガザナ小学校では、字も書けなかったレベル1の生徒が、自分の名前をアルファベットで、左から右に綺麗に書けるようになった。

「持続可能な開発目標」の目標4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」に貢献した。

・校舎を建設したことで、雨などの天候に左右されず授業のカリキュラムを終えることができ、生徒の卒業試験の合格率が23.8%から31.6%に上がった。

・建設作業員の内、17人の作業員が建築の専門試験を受けた。今後技術者として雇用される機会を増やすことに繋がった。

・教室の入り口やトイレにスロープを設置したことによって、障がいを持っている生徒でも利用しやすくなった。また、特別クラスを実施することで、学校を途中で退学してしまった生徒が再度教育を受ける機会を持ち、中学校に進学することができた。

・特別クラスに登録していた生徒の内5人が小学校の卒業試験に登

	<p>録し、1人は行政側のミスで名簿に名前が記載されず受験できなかったが、4人が受験し、2人が合格した。なお、不合格の2人も、進学先の学校の選択肢が狭まる可能性はあるものの、中学校への進学は可能となった。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>(ア) 校舎、教員住宅、トイレの建築</p> <p>住民のオーナーシップを高めるために、住民を巻き込んで、住民と共に校舎、教員住宅、トイレを建設した。そして、学校開発委員会、地域のリーダー、ゴクウエ・ノース地区行政とともに学校開発計画を見直し、新たな維持管理計画も作成した。計画の中では、校舎のメンテナンス、新校舎の建設、教育教材の購入、学習机と椅子の追加購入、学校の柵の取り付けなどの詳細が明記されている。今後、各校はこれらの計画書に沿って、ゴクウエ・ノース地区行政及び教育省と緊密に連携して、学校の開発に取り組む。</p> <p>(イ) 特別クラス</p> <p>校長及び学校開発委員会の管理の下、現在特別クラスで学ぶ生徒に対して授業を継続する。また、学期ごとに達成度を計る試験を行う。十分な学力がある生徒は、通常学級に通わせることも検討する。特別クラスの活動を安定的に継続していくために、養蜂やその他の収入向上活動を促進し、必要な資機材、教材を購入できるようにする。なお、学校への帰属意識を高めるために、運動会などで通常学級の生徒たちと交わる機会もつくる。</p> <p>(ウ) 収入向上</p> <p>乾燥し雨量が少ない環境を踏まえて、手作りの屋根を巣の上に作り直射日光を避けるなど、これまで培ってきた知識や技術を活かしながらさらに蜂蜜の収穫率を上げていく。学校開発委員会と特別クラスの生徒と保護者で月例会議をしながら進捗確認をし、問題が発生した場合にはすぐに対応する。学校周辺に常駐する農業普及員によるモニタリングも継続することで、学校や生徒は必要な助言やサポートを得られる。また、30年度からの新規事業地は本事業と近い場所にあるために、定期的に学校を訪問し、事業の進捗確認をすることが可能である。一方で、次期新規事業では、本事業の養蜂が計画通りに採蜜できなかった結果を踏まえ、収入向上の手段として新たに養鶏を取り入れている。</p>